肩からすーっと力が抜けた時 イメージどおりの曲線が 描けるようなりました

人 HITO

遠藤一幸（かずゆき）さん
（組み木細工製作者）

遠藤さんの手にかかると、ただの木片が今にも動き出しそうに生まれ変わります▶

皆さんは組み木細工をご存じですか。え、児童館で見たことがある？そうです。よく児童館や公民館に飾ってありますね。これらの組み木細工は、富士見にお住まいの遠藤一幸さんの手によるものがほとんどです。そう、遠藤さんは狭山へ組み木細工を広めた第一人者なのです。

遠藤さんが組み木を始めたのは17年前。まだ現役の熟練家具職人の頃です。あるデパートで行われていた北海道の物産展をのぞいた時のこと。以前、購入しながら使わずに置いてあった糸のこぎりの存在を思い出させてくれたのが、可愛い犬の親子の組み木細工でした。即座に購入して帰ったそうです。それからは、毎日糸のこぎりに向かう日が続きました。木の性質は知り尽くしていても、思うようにできませんでした。柔らかな糸のこぎりの感触になじめず、納得できない日の連続です。根を詰（こん）めて糸のこぎりに向かい続けていると、肩や腕は痛くなるし、もう止めようかと思ったそうです。それでも、ある日のこと。力の入らない腕で糸のこぎりに向かっていたところ、思いどおりの曲線が描けました。「これだ」と気付いたら後は木の扱いはお手のものです。知らず知らずのうちに肩に力が入っていたのです。

それからは、作品ができるのがうれしくて、でき上がるとポケットに入れて出掛けては、子どもたちにあげていました。子どもたちは作品が出てくる遠藤さんのポケットを「魔法のポケット」、遠藤さんを「木のおじさん」と呼んで慕いました。そんな遠藤さんの作品が目に留まって児童館や公民館へ講師として招かれるようになり、一時は坂戸市や都幾川村からも依頼がきました。一昨年体を壊し、病院通いが欠かせなくなりましたが「組み木が私を生かしてくれました」と語る遠藤さん。「長く続けられたのは組み木を通して多くの人との良いかかわりがあったから。病気に負けなかったのも、またみんなと組み木をしたいという思いがあったからです。」と語る遠藤さん宅には、個別指導を希望する生徒さんの予約がびっしり。「これからも温かい人との交わりをいただく代わりに、木のぬくもりを多くのかたに伝えていきたい」と語っていました。

狭山の生態系 63

アカショウビン
（ブッポウソウ目カワセミ科）

全長27㎝。全体が褐色を帯びた赤色の美しいこの鳥は、日本では夏鳥として初夏のころ渡来し、低地から山地のよく茂った林に生息します。薄暗い林の間を巧みにぬって活発に移動し、枝などに止まって獲物の昆虫・カニ・カエル・ムカデ・クモ・カタツムリ・小魚などを捕食します。「キョロロロロロロー」と初めに高く後になるほど下げ調子の遠くまでとどく口笛のような声で鳴きます。市内では以前、渡来シーズンになると周辺の雑木林で移動中のものが観察された記録がありますが、環境の変化などで最近は見ることが難しいようです。

撮影：県生態系保護協会狭山支部 矢内昭夫さん（水野）